

考古学者シュリーマンの伝記を再読する 西洋史学

某出版社から、さる高名なドイツ文学者の方（故人）が訳したシュリーマンの『古代への情熱』を文庫で復刊することになったので、解説を書いてほしいと頼まれました。『古代への情熱』といえば、かつては偉人伝の古典として知られ、私も高校時代に世界史の先生に勧められて愛読した懐かしい本です。喜んでお引き受けしたのですが、改めて目を通すにつれ、訳文や註に疑問点が少なくないことが分かってきました。その一つが、シュリーマンが発掘したトロイアの場所を論じたデメトリオスという人物についてです。デメトリオスは古代ギリシアではありふれた名前です。同名異人がたくさんいます。もとの註では、このデメトリオスをアテネの著名な哲学者であるファレロンのデメトリオスと説明しているのですが、典拠がよく分かりません。また、岩波文庫他の訳を見ると、「懐疑哲学派のデメトリオス」、「懐疑の人」などとされているのですが、これもあまりピンときません。ところが、原文を参照したところ、謎は一瞬で氷解しました。というのも、そこには Demetrios von Skepsis、つまり「スケプシス（トロイアの近くにあった古代都市）出身のデメトリオス」と書かれていたからです。では、なぜ彼が懐疑哲学者などに化けてしまったのでしょうか？ 実は、スケプシスという地名は、ギリシア語由来のドイツ語の普通名詞で「懐疑」を意味する Skepsis と綴りがまったく同一です（ドイツ語では、普通名詞も大文字で書き始めます）。一方で、スケプシスは、歴史的に有名な都市というわけではないので、これまで多くの翻訳者がこの地名を普通名詞と誤解してきたのも無理はありません。これを機に原文と照らし合わせながら再読することで、私にもたくさんの新しい発見がありました。皆さんも、ぜひ一度、波瀾万丈の人生を送ったこの稀代の考古学者の伝記を読んでみませんか。

周藤芳幸 教授

角川ソフィア文庫で復刊された『古代への情熱』



外国人労働者の日本語 応用日本語学

コロナウィルスの影響により各国で実施されていた出入国の制限が緩和され、外国人の姿を町で見かけることも増えてきました。では、観光などの短期滞在者を除いた、在留外国人数の多い都道府県ベスト3はどこでしょうか。一位は、みなさんの予想通り東京都です。二位は愛知県、三位は大阪府です。日本人も含めた総人口でいうと、愛知県は、東京・神奈川・大阪に次ぐ4位なので、愛知県は外国人が多い都道府県だと言えます。愛知県に外国人が多い理由の一つに、愛知県が産業集積地であり、特に製造業が盛んなため、多くの外国人労働者とその家族が居住していることがあります。外国人労働者と一口に言っても、その在留資格、国籍、業種は様々です。また、語学力も千差万別で、高度な日本語力を駆使して、複雑かつ高度な業務に従事する人もいれば、知っている日本語は挨拶程度で、業務ではほとんど言葉を使う必要のない、単純労働に従事している人もいます。

もっと日本語を学んで、日常生活を快適に暮らしたり、友人や知り合いを作ったりしたい。そんなふうに見える外国人は、どこで勉強すればよいのでしょうか。日本政府による公的な学習支援はまだ限定的で、民間の日本語学校はコストや通学の面で利用が難しかったりすることもあり、各地域でボランティアが運営する日本語教室が受け皿になっているという現状があります。しかし、この日本語教室も、担い手の高齢化が進むなど、存続に困難を抱えているところもあります。興味があれば、事前にアポイントをとって、お住まいの市町村の日本語教室をのぞいてみてください。高校生・大学生といった若いお客さんは、ボランティアも外国人の方も大歓迎です。そして、まずは「やさしい日本語」で外国人の方と話してみてください。日本で暮らす外国人の生の声に耳を傾ければ、きっとみなさんの世界が広がります。

俵山雄司 准教授

一般向けの講座で話す筆者



人とつながる価値の研究 社会学

人とつながる必要性について考えたことはありますか。昨今のウィルスの蔓延によって、人と人の接触機会は大きく減りましたが、私たちの生活は維持されています。情報通信技術やサービスの発達によって、人と会い、ともに時間を過ごし、協力する必要性は薄れつつあるのです。私の場合、大学の講義をオンラインで受け、インターネット等で疑問を解決することができました。そして、現代は暮らしの便利さが増す一方で、人と人の関係が希薄になる側面があると実感しました。

「人とつながることにはいかなる価値があるのか、それはいかにして残りうるのか」という関心から卒業論文のテーマにしたのが、「フリーランサー」の方々の社会関係です。会社組織に所属せず、個人で仕事を受注するフリーランサーが、いかなる場合に直接的な社会関係を構築するかを調べることで、人とつながる価値について考えることにしました。

調査にあたって、仕事を受注できる「クラウドソーシングサイト」で調査対象者を募集し、インタビューを行いました。貴重な時間を無駄にしないよう、事前にあらゆる視点から質問項目を整理し、インタビューの途中でも、予期せぬ回答に対して背景を深掘りする工夫が求められました。得られた回答を何度も見返し、分析を重ねるのには骨が折れましたが、先生や仲間との議論もあり、彼らの世界が少しずつ鮮明に理解できるようになりました。結果としては、仕事を受注できるサービスや学習コンテンツの充実により、人と直接つながる必要性の低い職種が登場する一方で、人とのつながりには、公開されていない情報やリアルティのある情報を得られたり、気晴らしやモチベーション向上にもつながるといった価値があり、そうした価値が重視されていく可能性を示すことができました。また、SNSの発達にともなう、人とつながる形の変化も見えてきました。

皆さんにもぜひ、調査を通じて過去や現在の社会を理解し、未来の社会を構想することの面白さを感じていただきたいです。

横江友衣 学士課程4年

上村ゼミの様子



月刊 名大文学部 第132号

隔月刊行



編集発行：
名古屋大学文学部広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp
寄稿者の所属と学年は寄稿時点のものです。
2023年3月10日発行